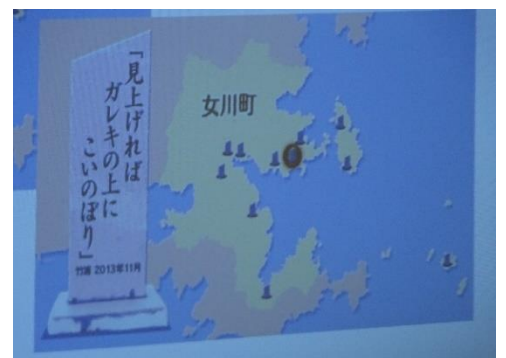


15日に、海洋教育研修会が開かれ、初声中の藪崎先生に、日本財団主催の研修会に行った時のお話を伺いました。女川町の復興の話が中心でしたが、海に囲まれている三浦にとっては、切実な話題でした。

海洋教育は、自分の町を好きになるための学習ではないか、というまとめに、共感した参加者が多かったようです。また、女川町の中学生が作った「見上げれば ガレキの上に こいのぼり」という俳句が胸を打ちました。

日本財団の池田さんから、「今日の話の中に、教材になる話がいくつかあった。授業の種に敏感になってほしい。海洋教育を通して、教員が交流し合う姿が見られれば」というお話があり、東京大学海洋アライアンスの田中さんからは、「震災の記憶を後世に伝えるためには、教育現場の先生方の力に負うところが大きい」ことや、「海と人との共生のために、海とどう向き合っていくか、を考えることが重要だ」という指摘をいただきました。

終了後、教員同士で、情報を交換し合う姿があちこちで見られ、研修会の意義を再確認しました。



## 海洋教育体験記その1

三崎小学校 佐藤美沙樹

三崎小の子どもたちは、小さい頃から海と親しみ育ってきました。「海は大好き。でも、あまり魚のことは知らない。」という子どもたちもいるのです。H28年度の4年生23名は、三浦の海についてもっと知りたいと、それぞれ興味をもった魚や貝などを調べてみることにしました。調べれば調べるほど、分かることもあれば、「なぜ？」という疑問も生まれてくるものです。

2月23日(木)に観音崎自然博物館へ出かけました。天気は、あいにくの雨。(かなりの悪天でした！！)自然博物館の中には、東京湾や相模湾に棲む生き物がたくさん展示してありました。子どもたちは、えさを



を食べる様子や生き生きと泳ぐ魚たちの様子に釘づけでした。中でもタコの動きが大人気。タコの頭のように見える部分は、頭ではなく胴体であることを知りました。そして、ちょうどタコ壺から足を出したタコを発見！みんなでじっくり見ていると、足の吸盤を上手にを使って、壺の外にある貝殻をとりました。そして、口元へもっていったのです。「タコは、貝殻を食べるんだ！」「足の吸盤をあんな風につかうなんてすごいな。」と驚きの声。学校に戻り、博物館で見たものや学んだことを意見交流しました。みんな目的意識を持ってよく観察していたので、友達に伝えたいという思いに溢れた交流会になりました。

三崎小には、今年、「海洋教室」ができました。子どもたちがこれまで調べてきたことを掲示しています。また、海の生き物を飼育することもできます。これからどんな生き物が三崎小へやってくるのか、とても楽しみです。

みうら学・海洋教育研究所（854-9443）